日本科学者会議（JSA）滋賀支部
NEWS　LETTER
2022 年 3 月 8 日発行 第 77 号
事務局長　小島　彬
TEL/FAX：077-589-3724
Email：akrkojima@ybb.ne.jp

【活動報告】滋賀教育のつどい分科会報告

個人会員分会　田中成幸

１月 29 日（土）近江八幡の G-NET しがで**滋賀教育のつどい**が開かれ、午前中は各校種から若手の先生方の思いを聞き、それをもとに高垣忠一郎氏の講演と質疑応答、午後は課題別分科会が開かれ、JSA 滋賀支部が関わる「生きる力と学び」の分科会はオンライン参加を含め 10 名の参加であった。冒頭、共同研究者（山上修／滋賀民研）から問題提起。「こどもはどんなときに前向きに生きようとし、おとなはどうかかわればよいか」。１）おとな(他者)から存在自体を喜ばれ、思いを受けとめ・共感され、認められたとき。２）感動体験したとき。そのために、学校は知識を与えるのではなく、感動体験させ、すごい！なんで？やりたい！知りたい！と、子どもの心に炎を燃え立たせ、子ども自らが、考え、問題提起し追求する場をつくることだと。

報告１「児童保健委員会による『おなやみそうだんしつ』の取り組みから考える」

佐々木明香／大津市立大石小

前任校上田上小（全校児童 77 名）で取り組んだ保健児童委員会によるピアカウンセリングの報告。ピアカウンセリングとは同じ背景を持つ者同士が、対等な立場で話を聞きあいサポートを行う。保健室前に「おなやみそうだんしつ」専用のポストを置き、「そうだんシート」に無記名で相談内容を書いてポストに入れる。これに保健委員会の児童がアドバイスし、「はーとつうしん」に掲載し各クラスに掲示する。例えば、「Q：さいきんいろんなことで心がはれません。どうしたら元気になれますか？→A：〈高学年向け〉ボランティアをしてみるのはどうですか。小さい子と遊んでみるのはどうですか。〈低学年向け〉いちどぐっすりねむってみたらどうですか。５年生が外で元気に遊んでいるので、一緒に遊んだらいいと思います」。「Q：算数が苦手です！！どうしたらいいですか？→A：まずしっかり勉強中に話を聞きましょう。５年生の教室にプリントを持ってきてください。勉強会をしているので、お兄さんお姉さんが教えてくれますよ」

「はーとつうしん」を読み、みんなこんな悩みを持っているんだとか、同じような悩みが私にもあると保健室で話したり、相談した児童が保健委員のアドバイスに喜んだり、子ども目線のアドバイスが好評だった。これまで保健室で先生と話せると思って保健委員になる児童がいたが、この取り組みでアドバイスをする側に立つことで成長し、こんなに力があったのかと感心させられた。スクールカウンセラー頼みでなく悩みを共有しあう大切さを認識した。一方でピアカウンセリングのサポーターの育成が必要で、委員会メンバーが毎年変わっても成果を保てる支援の工夫も課題だ。

報告２「生きる力をあたためる」

神原心／市立中学校教諭

３年間担任した知的障害の男子生徒の生きる力を育む実践。姉も３年間担任し、母からの信頼があった。入学時は 133cm の身長が 160cm になり、カタカナを書くのが怪しかったのが辞書で調べて漢字を使い、300 字は書けるようになった。時計が読めず九九の５の段以降が言えなかったが、３桁の掛け算や余りのあるわり算ができるようになった。３年間で小学校６年間の学力をつけた。

入学当初、朝食はほとんど食べず登校、靴下はひどく破れ、下着も１週間以上同じものを履いていた。ご飯の炊き方や味噌汁の作り方、洗濯や衣服のたたみ方など生活の術を担任が教えていった。２年生になると嫌がっていたことも進んでやるようになった。数学の時間、「あ、洗濯物を干すのを忘れていた」と立ち上がったときも、数学の先生が「生きる力あり

ますわぁ、偉いですね」と温かく対応してくれた。きちんと朝食をとるようになると、兄弟で奪いあっていた食べ物も分けあうように変化した。「えー、やりたくない」「できひんもん」といっていたが、成功体験を重ねるうちに「やったことがないからやってみたい」と変わった。課題と向き合うことで変化する自分を感じ、できることが増えることで自分の世界が広がることを実感。これが変化の原動力なのだと感じている。

討論では、「支援と突き放し」の絶妙なバランスが素晴らしい。「できることはやろう」「できるのにやらない」その境目はむずかしいが、その基準を持つことは、自立のためには重要。あくまで自立のための教育でありケアではない。困ったときにどのようにして助けを求めるか、困ったことを言える力、人に頼ることも生きるために必要な力である、などの意見がでた。

報告３　**「１８歳選挙権を考える」**

東川宏／長浜北星高

３年生の現代社会の授業報告。昨年 10 月の総選挙で、選挙権を持つ３年生の 58.2%が投票。全国の 18 歳の投票率 51.14%より高い。その８割以上が投票日に投票。前回 2017 年の総選挙でも全国 53.68%に比べ 57.9%と高い。また女子が２ポイントほど多い。全国でも５ポイント女子が多い。討論でも話題になった。以下に生徒の声をあげると、「初めてでわからないことだらけだったが、意外と簡単で私の一票が社会に貢献できるのならこれからも選挙に行こうと思った」「初めてなのに一人で投票に行った人が思ったより多くてびっくり」「18 歳より 19 歳の方が投票率が低いので今年行かなかったらこれから先余計にいかなくなるのではと感じた」「両親と同じ人に投票したが、次からは自分の意志で投票しなくてはと思った」など。

現代社会の授業では立憲主義や選挙制度、政党の主張にも触れる。立憲主義では、選挙とは「憲法を守る側の人間」を選ぶこと、国民は選挙後も選んだ人が憲法を守っているかのチェックが重要だと学ぶ。アンケートでは時事問題や政治・政党への関心や知識不足が見られたが、一票で政治は変わらない、投票はめんどくさいといった態度にも通じる。

討論では、世界では若者の多くが政治に関心を持つ。学校の中で自治の力をつける実践をすべきだ。ブラック校則問題では、先生ではなく生徒から問題提起すべきだなどの意見が出た。家族や他人の影響でなく主体的に投票する力を教育の中でいかにつけさせるか課題だ。

報告４　**「民主主義の担い手となる市民を育成する方法としての紙上討論学習」**

西村太志／滋賀県立大･大津清陵高馬場分校

自分の考えを表現したり、他人の意見を聞いて論理的に承認したり批判できる力は、生きるうえで大切な力だ。グループの中での同調圧力があっても討論を成立させるために、対面討論の短所を補い、生徒の思いや意見を集団全体に反映させる方法として紙上討論が提起された。

紙上討論の長所①面と向かって意見を言えなくても質の高い討論を可能にする②全員が意見表明できる③考える時間を取れ、意見を深められる④他者の意見を聞き逃さず把握できる⑤教師が次の展開を考え、教材研究に時間を確保できるなど。授業報告は、マンション建設と景観をテーマに紙上討論を用いた実践。紙上討論では、生徒の手書きの意見の整理が必要でその作業に多くの時間を要する。教員の多忙な環境では、紙上討論の効果は認めても何度もできない。今後、一人一台のタブレットが普及すればクリアされるが、その有効な使い方は今後の課題になる。リスペクトがないと討論は成立しない。また感情も大切。感情は討論のエネルギーになる。「つらい、悲しい、かわいそう、うれしい」といった感情をどう討論に組みこんでいくかも重要な視点である。

こどもにどのようにして「生きる力」をつけさせるか、今後もさまざまな実践に学びながら深めていきたい。

【年会費未納の方へのお願い】まだ 2021 年度会費が未納の方は至急振込みを願います。会員は 10,200 円、読者は 7,200 円で、ゆうちょ銀行口座への振込は口座記号が 01010-2-、口座番号が 13605(右詰めで記入)、加入者氏名は日本科学者会議滋賀支部です。